

バンコクの洪水と飲食業の進出

● 放 眼 日 中



洪水騒ぎが深刻だった昨年11月にタイのバンコクへ行った。空港から市内の中心部まで洪水に襲われた様子は全く見られず、市民も普段通りの生活をしていった。ホテルで日本のニュースが何度と同じ映像を流しながら、いかにもバンコク全土が水没したかのように洪水の被害を伝えていくことには正直言つて、違和感を覚えた。

バンコクの日本人学校は約1カ月間休校し、2000人以上の日本人家族が日本へ避難したという。一方、知人の子どもが通うインターナショナルスクールは平常通り授業を行っていた。筆者が11月中旬に東京行き の飛行機を予約しようとする、普段は安い米系航空会社のチケットが日系航空会社より何と高くなつてい

た。欧米人は洪水が収まったといち早く判断し、米系の飛行機は満席になつたのだが、日系の飛行機はガラガラだったのだ。双方の違いは何か。確かに知人が工場長を務めるアユタヤは全域が水没し、「アユタヤ湖」になつてしまった。「恐らく半年は復旧しない。日本の東日本大震災でダメージを受け、今度はアユタヤだ。もうやっていられないよ」と嘆く。実際、東京で眼鏡を造ろうとしても、日系大手メーカーのアユタヤ工場が停止しており、通常より1週間余計にかかる。ハードディスク駆動装置(HDD)を買いに行つても在庫切れと言われるなど、われわれの日常生活にも影響が出た。そのアユタヤでも水が引くと、今度は一転して「復興、復興」との声が上がる。

一方、バンコク市内への日系飲食業の進出が止まらない。今回の洪水騒ぎがあつても、進出計画をストップする店はあまり見られないという。ラーメン専門店から焼き鳥屋まで、既に相当数の日本食料理屋がひしめく激戦地に何故また彼らはやつて来るのか。「上海など中国の市場を見てきたが、バンコクのポテンシャルは極めて高い」とあるオーナーは話す。

日本である程度成功した人々が、自分の体力のあるうちに海外進出したいと考え、自分の店の味で十分に太刀打ちできる市場を探すとすると、上海ではなくバンコクだというのだ。顧客のターゲットも勿論日本人ではなく、所得水準も上がり、日本食を好むタイの中産階級だ。そこには洪水の影はなく、同国経済が落ち込むとの見方はほとんどない。日系製造業は洪水により甚大な被害を受けたが、そんなことは一向に構わず、どんどん進出計画を進める日系飲食業。立場も業務の内容も違うのだが、同じ日本人でこうも対応が異なるのだろうかと思つてしまふ。

タイの老人が呟いた。「チャオ普拉ヤは恵みの川だ。昔は川の氾濫は豊穡をもたらす良い出来事だった。人間が水田に工場など建設するからこんなことになるんだ。悪いのは全てわれわれだ」。災害と円高、日系製造業にとつて2011年は鬼門だったが、サービス業にとつては、震災で日本市場の劣化が鮮明になり、海外へ踏み出す新たなきっかけを得た年となつたようにも見える。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。